

## 平成29年度 学校図書館県内研修会 レポート

平成29年度の県内研修会は、6月27日（火）に静岡県藤枝市にある藤枝明誠中学校・高等学校を会場に開催されました。藤枝明誠中学校・高等学校は、今年で創立35周年、前身の裁縫女学校時代から数えると90年以上の伝統を持つ学校です。サッカー・バスケットボール・陸上競技部など全国大会常連のクラブも多く、今年の夏の全国高校野球選手権大会で野球部が見事甲子園出場を果たしたことは記憶に新しいことと思います。高い進学実績を誇り文武両立を実践し続けるそんな藤枝明誠中学校・高等学校をお借りし、今回も大変有意義な研修会となりました。



### 《午前》

私学教育振興会図書専門部会長・飯田瑞穂先生（桐陽高等学校長）と会場校である藤枝明誠中学校・高等学校の校長・埴博先生のご挨拶後、会場校での図書活動の紹介に続き校舎見学をさせていただきました。丁寧な校舎案内の後に図書室に戻り、そこで4つの集団に分かれてのグループディスカッションを行いました。ここでは、各グループでテーマを設定した上で各学校の抱える問題点や新しい取り組み等についてお互いに意見を出し合い、貴重な情報交換の場となりました。



### 《午後》

休憩をはさみ、午後は講演を実施いたしました。今回は株式会社新潮社で広報宣伝部次長を務められる馬宮守人氏を講師にお招きし、「最近の若者の読書傾向と“ワタシの一行”プロジェクト」と題して講演をしていただきました。馬宮氏は1983年に新潮社入社、『芸術新潮』編集部を経て『週刊新潮』編集部に移動、記者・デスクとして特集やグラビア記事、コラムの取材・執筆に携わってきた方です。2012年からは広報宣伝部に所属し、以来、今回の講演のテーマとなっている「ワタシの一行」プロジェクトを担当し現在に至っております。

「ワタシの一行プロジェクト」とは、新潮社が提案する、本を子供たちにとってより“身近なもの”とし、知らず知らずのうちに“読書の愉しみや奥深さ”を子供たちに身につけさせようとする新たな取り組みです。活字離れが叫ばれて久しい現在、学校図書館でも生徒の読書離れは深刻です。どの学校でも、どうすれば生徒が読書に親しむようになるか知恵を絞っていることと思います。一方で、子供たちの活字離れは将来の読者層の先細りにつながるもので、出版社にとっても死活問題といえます。そうした中、出版社である新潮社が我々教育現場の人間に提案してくださった「ワタシの一行」プロジェクトは、大変斬新で将来性を感じさせる取り組みです。



「ワタシの一行」は次の3ステップから成ります。

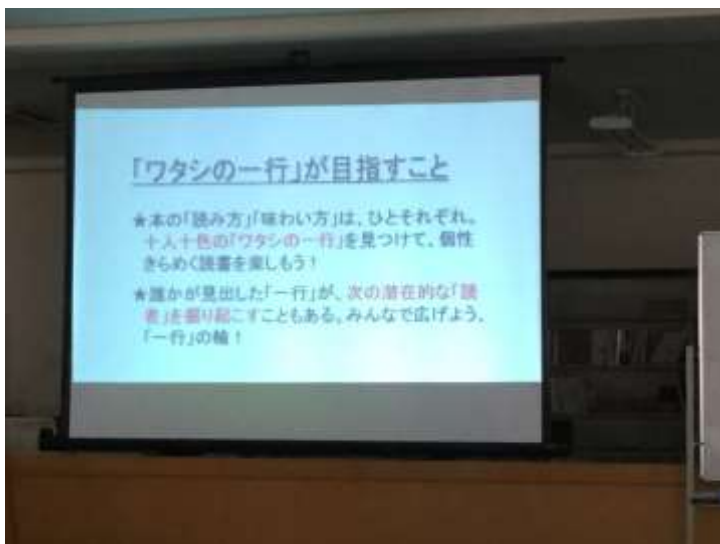
- ①好きな本を読んで、その中からお気に入りの「一行」を抜き出す。
- ②なぜその一行をえらんだのか、簡単に文章でまとめる。
- ③それぞれ、自身が選んだ「一行」を発表しあい語り合うことで読解力を高めあう。

教育現場での読書活動といえば読書感想文が王道であり、その存在価値はゆるぎないものがあります。一方で、課題としての読書感想文が苦痛で、逆に読書離れを引き起こしているという指摘もあります。ネット世代の中高生にとっては活字本を一冊読み切るという経験自体が希少化しており、新たな読書啓発活動の提案は時代の要請とも言えます。近年、右肩上がり注目度が増しているビブリオバトルなどはその典型であり、今回の「ワタシの一行」もその系譜に連なるものといえます。

読書感想文が「感想文を書く」という表現技術の部分にいつの間にか目的の重点が移ってしまい、本来の「作品を鑑賞する・読解する」という側面がフェードアウトしているのではないかと懸念を抱く教員は少なくありません。一方、「ワタシの一行」は“文章を書く作業”よりも、“その一文を選ぶ行為”に重点があります。「ワタシの一行」で求められるのは、型にはまった文章を綴るだけのうわべの作文能力ではありません。作品を構成する無数の文章の中から「これぞ」という一文を射止める感性の鋭さ、それに尽きます。それは、さながらとうとうと流れる川底の砂の中からきらめく砂金を掬い上げるかのようなもの。しかし、それは、本を通じて新たな価値を発見するという読書の喜びの原風景を子供たちにもたらすことでしょう。

馬宮氏は、「ワタシの一行」プロジェクトが教育現場にもたらす効果として、次の5つをあげておられます。

- ①子供たちが本に出合うチャンスが広がる。
- ②朝読書の記録や読書ノートを一行で記録できる。
- ③あらすじを追うだけの感想文から、個性が輝く感想文へ。
- ④それぞれが自分の「一行」を語り合うことで、互いの読解力に磨きがかかる。
- ⑤総合学習に活用でき、学校図書館の活性化につながる。



何より生徒がとっつき易いというのが、「ワタシの一行」の最大の利点といえます。なるほど、まずは本を手にとってくれないことには読書は始まりません。一方で、感覚的に読書を楽しむだけではやはりもったいない。しっかりと文章を読み込むことでその世界観をつかみ、そこから深く洞察するという読書の真髄にいたるには、読書感想文の手法はまだまだ有効、健在です。「ワタシの一行か読書感想文か」という二者択一ではなく、「ワタシの一行も読書感想文も」という“いいとこ取り”こそ、教育現場での読書の復権には不可欠な要素であるという思いを強くした馬宮氏の講演でした。今後、ビブリオバトルや「ワタシの一行」プロジェクト等の普及が予想されることから、こうした新たなムーブメントと既存の読書推進活動との相乗効果を促すための手法について研鑽を積むことが、これからの学校図書館運営のポイントとなることと思われます。

専門委員；永田泰大（日本大学三島高等学校・中学校）